

平成18年11月25日

明日香村教育委員会

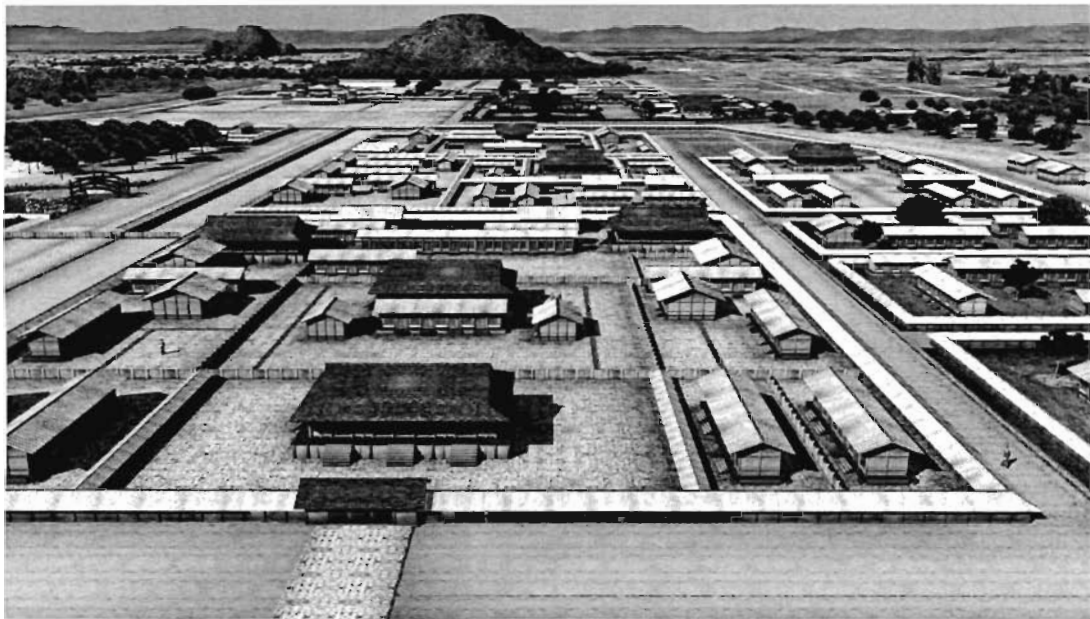
明日香村発掘調査報告会

2006

開 会 1:00～

調査報告 1:10～ 「竹田遺跡の調査」 高橋 幸治

「真弓遺跡群の調査」 西光 慎治



飛鳥宮のイメージ

講演 2:50～ 「最近の調査からみた飛鳥宮」

講師 林部 均 氏

橿原考古学研究所 総括研究員

竹田遺跡（2006－4次）の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥・東山

調査原因：範囲確認調査

調査面積：約 900 m²

調査期間：2006年6月1日～現在継続中

はじめに

竹田遺跡は飛鳥寺の北面大垣を東へ約 20m、金堂からは約 200mの距離にあたり、現在の八釣集落より西の狭小な丘陵部の南側に所在する。南には飛鳥坐神社が、北西には中世山城である飛鳥城がある。また南東の大字小原には藤原鎌足公誕生地・大伴夫人之墓がある。飛鳥寺の北面大垣はそのまま東へと進み、八釣集落ひいては桜井市高家古墳群方面へと続くルートとなっている。このルートの西の始まりは竹田道と呼ばれていたことが、小字名「竹田道ヨリ北」より窺い知ることができる。

文献によると『万葉集』第三巻 262 首に「矢釣山」を詠った歌がある。この歌は柿本人麿が天武天皇と藤原夫人（ぶにん・おほとじ）五百重娘（いほへのいらつめ）との間に生まれた新田部皇子に献った歌に対する反歌である。このことから、新田部皇子の邸宅が、現在の八釣集落近辺にあったのではないかとされてきた。

当調査地近辺における発掘調査は、これまで明日香村教育委員会が住宅の建設などに伴う発掘調査として行ってきた。村教育委員会の 1998－7次調査である東山カワバリ遺跡の発掘調査では、7世紀中頃以前の掘立柱建物もしくは塀を検出している。また、飛鳥寺創建当時に使用されていた可能性の高い鴟尾が出土した。その他、飛鳥寺で使用されている埴や石材（流紋岩質溶結凝灰岩）なども出土している。これらのことから飛鳥寺に関連した何らかの施設がある可能性が考えられた。2000－11次調査では東西方向の溝や掘立柱塀を検出した。この溝は、ほぼ座標に沿うような東西方向の溝であったことから、東西道路の北側溝の可能性が考えられている。出土遺物には輪羽口・竈・製塩土器などが出土している。石材は東山カワバリ遺跡同様、流紋岩質溶結凝灰岩が出土した。また破片ではあるが、砂岩も出土している。

検出遺構

建物① 柱掘形が 100～130cm の方形もしくは隅丸方形を呈し、南北三間×東西二間以上となる総柱建物である。柱間は掘形の心々で 180cm を測る。柱穴の切り合いから後述する建物⑩に先行する。A 区において検出した。

建物② 柱掘形は 80～90cm の隅丸方形もしくは楕円形。柱痕跡は径 25～30cm。柱間は南北 220cm、東西三間×南北三間以上の南北棟建物となる。B 区において検出した。

建物③ 柱掘形は 85～90cm の方形もしくは隅丸方形を呈している。柱痕跡は径約 20cm を測る。柱間は東西 195cm、南北 220cm で、東西二間以上×南北一間以上の建物である。B 区において検出した。

建物④ 柱掘形は 95～100cm の方形もしくは隅丸方形を呈し、柱痕跡は径 20cm を測る。柱間は南北 210cm、東西 194cm で、東西一間以上×南北一間以上の建物である。C 区において検出した。

建物⑤ 柱掘形は85～95cmの方形もしくは隅丸方形を呈し、柱痕跡は径15cmを測る。柱間は東西140cm、南北160cmで、東西二間×南北二間以上の南北棟建物となる。C区において検出した。

建物⑥ 柱掘形は100～110cmの方形もしくは隅丸方形を呈し、柱痕跡は径25～30cmを測る。柱間は東西200cm、南北220cmで、東西四間×南北二間以上となる。C区において検出した。

建物⑦ 柱掘形は60～70cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径15cmを測る。柱間は東西180cm、南北230cmで、東西一間以上×南北一間以上となる。D区において検出した。

建物⑧ 柱掘形は45～60cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径約15cm。柱間は東西155～160cm、南北195～200cmで、東西三間×南北二間の東西棟建物である。B区において検出した。

建物⑨ 柱掘形は45～50cmの方形もしくは隅丸方形を呈し、柱痕跡は径約12cmを測る。柱間は東西160cm、南北160cmで、東西一間以上×南北二間以上の建物となる。C区において検出した。

建物⑩ 柱掘形は70～80cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径約20cm。柱間は東西180cm南北140cm南北二間×東西二間以上の東西棟建物である。柱穴の切り合いから建物①より新しい。A区において検出した。

建物⑪ 柱掘形は30～40cmの円形もしくは楕円形を呈し、柱痕跡は、径約15cmである。柱間は190cm～200cmで、東西三間×南北四間以上の総柱建物である。D区において検出した。

塀① 柱掘形は100～120cmの方形もしくは隅丸方形を呈し、柱痕跡は、径約10cmである。柱間は185～190cmを測る。四間以上の南北塀となる。C区において検出した。

出土遺物

石器、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、墨書土器、瓦器、瓦、埴、轆羽口、鉄滓、石材（流紋岩質溶結凝灰岩・砂岩）などが出土した。

総括～まとめと今後の課題

今回の調査では、主に丘陵に近い北側の調査区で、飛鳥時代の後半を中心とした建物群の一部が検出された。柱穴は一辺1m近い規模をもつものもあり、飛鳥地域でも大型のものである。調査区が狭く建物配置などを明確に把握することができなかったが、柱穴の規模などから、皇族や高位高官などの邸宅の可能性が考えられよう。これらの建物群は、いくつかのグループに分れる。建物①・②・③、建物④・⑤・⑥、塀①、建物⑦・⑧・⑨、建物⑩で、平安時代の建物⑪も一棟検出している。これらの建物群の違いは、時期によるものなのか、建物の敷地などによる違いなのかは明らかではない。また、調査地近辺が八釣の集落に近いことなどから、新田部皇子との関連性も注目される。いずれにしても、飛鳥周辺の狭小な丘陵部に飛鳥時代の邸宅があった可能性が高まったことは重要である。こういった地域での土地利用状況の一端が明らかになったことから、当時の宮都の空間構造を考える上で重要な資料を提供できたといえよう。今後の周辺での発掘調査が期待される。

参考資料

『万葉集』第三卷 261 首

「やすみしし わご大王 高輝らす 日の皇子 栄えます 大殿の うへに ひさかたの 天傳ひ来
る 白雪じもの 往きかよひつつ いや常世まで」

(大意)

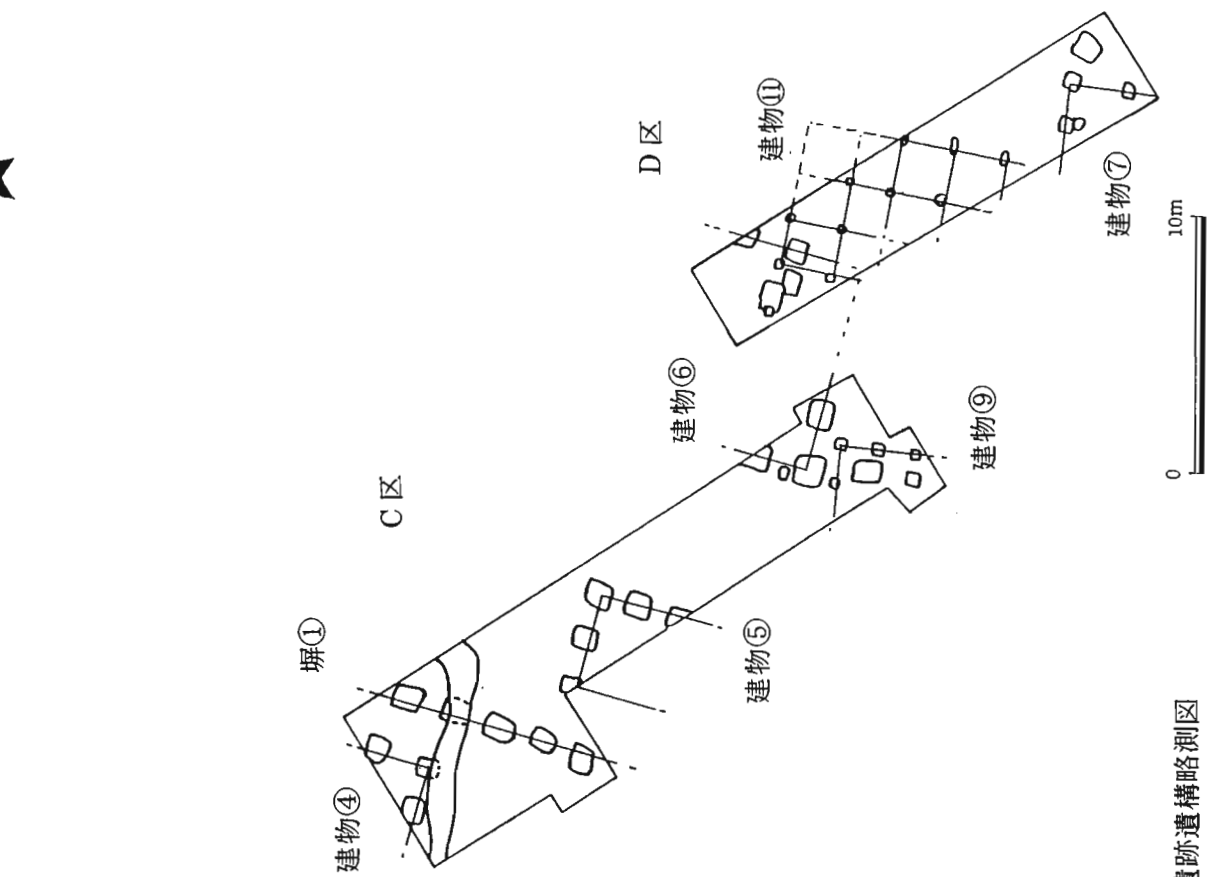
<わが日の皇子の栄えておいでになる大殿の上に、大空から降って来る真白な雪のように、しきりにこの御殿にかよい、いよいよ年久しくいつまでもお仕え申し上げたいものです>

『万葉集』第三卷 262 首

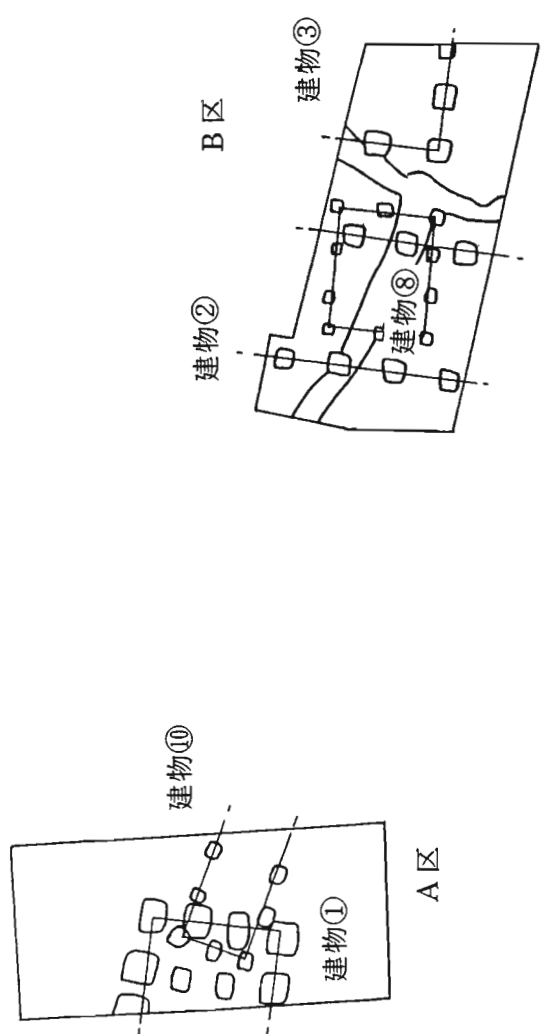
「矢釣山木立も見えず降りまがふ雪にうぐつく朝楽しも」

(大意)

<矢釣山の木立も見えないほどに降りみだれる白雪の中を、馬を走らせて御殿に来る朝はほんとうに楽しい>



竹田遺跡遺構略測図



調査地位置図

真弓遺跡群(2006-5次)の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字真弓地内

調査原因：村道地ノ窪線新設に伴う事前調査

調査面積：223 m²

調査期間：2006年6月1日～8月31日

はじめに

調査地は貝吹山の南側を東西に伸びる農免道路から地ノ窪集落へ通じる旧道の東側丘陵にあたる。越峠から西は東西に広い谷部が形成されており、この谷部を挟んで両側の尾根筋には数百基の古墳が密集している。この地域には真弓籬子塚古墳や乾城古墳、与楽籬子塚古墳など穹窿式の横穴式石室をもつ古墳が点在しており、またミニチュア炊飯具など渡来系と考えられる遺物も数多く出土している。

今回の調査地は貝吹山の南側斜面に対峙した丘陵地にあり、周辺にも多くの後・終末期古墳が点在することから関連した遺構の検出が予想された。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構には横穴式石室、木棺墓等がある。

I区 顕著な遺構・遺物は出土していない。谷堆積を確認。

II区 顕著な遺構・遺物は出土していない。

III区 古墳2基、木棺墓2基を検出した。

【III-A区】

スズミ1号墳 一辺約10mの方墳である。埋葬施設は南に開口する右片袖の横穴式石室で大半の石材が石取りにより失われている。石室は復元長6.5m以上で玄室長約4m、幅約2.1mである。石材は斑礫岩、黒雲母花崗岩が使用されている。石室内からは土師器・ミニチュア炊飯具(竈・甑)、鉄釘が出土している。鉄釘の配置等から主軸に平行して2棺埋葬されていたと推定できる。

【III-B区】

顕著な遺構・遺物は出土していない。

【III-C区】

スズミ2号墳 一辺約7mの方墳である。埋葬施設は南北に主軸をもつ木棺直葬である。木棺は長さ2.1m、幅70cm、深さ40cmで、棺内から耳環、鉄釘、歯牙が出土している。

木棺墓1 スズミ2号墳の南東裾に造られたもので南北に主軸をもつ。木棺は推定長1.8m、幅50cmである。墓坑内から土師器、鉄釘が出土している。

【III-D区】

木棺墓2 南北に伸びる尾根筋の頂部に造られたもので主軸は北に対して西に14°振れる。木棺長は1.8m、幅60cmで棺内から耳環、鉄釘が出土している。

出土遺物

土師器・ミニチュア炊飯具(竈・釜・甑)・耳環・鉄釘・歯牙が出土した。

総括～まとめと今後の課題

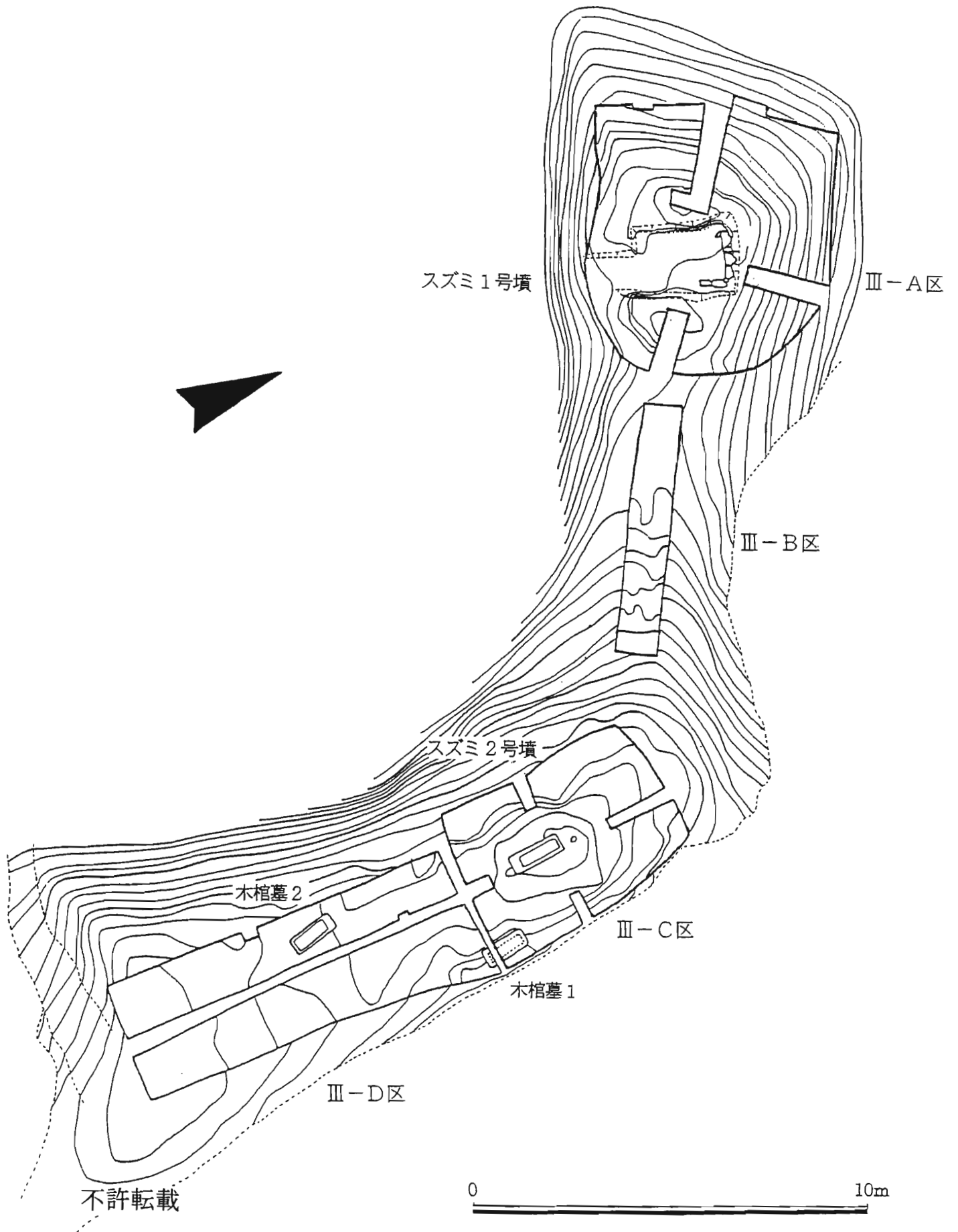
今回の調査では貝吹山の南の谷部より更に南側の場所でミニチュア炊飯具を埋葬した横穴式石室を検出することができた。これまでの調査では前川の右岸(貝吹山の南側斜面)にある与楽古墳群からミニチュア炊飯具や釵子をもった古墳が検出され、また穹窿式横穴式石室が点在するなど渡来系の人々の墓域ではないかと注目されてきた。今回、谷部を挟んだ南側の丘陵部からミニチュア炊飯具が出土したことで渡来系とされる人々の墓域が前川左岸にまで広がることが明らかとなった。今後は越峠から西の谷部と貝吹山南側斜面を含めた範囲の保全・活用を踏まえた計画的な調査が望まれる。

	古墳名	所在地	石室形態	ミニチュア炊飯具	参考文献
1	上5号墳	明日香村	右片袖	竈・甑・釜・鍋・甕	『上5号墳』 榎考研 2003
2	与楽古墳群 ヲギタ2号墳	高取町	—	竈・甑・釜	『与楽古墳群』 榎考研 1987
3	与楽古墳群 ナシタニ1号墳	高取町	右片袖	竈・甑・釜・鍋・甕	同 上
4	与楽古墳群 ナシタニ2号墳	高取町	右片袖	竈・甑・鉢他	同 上
5	与楽古墳群 ナシタニ5号墳	高取町	—	竈・甑・罎	同 上
6	与楽古墳群 ナシタニ6号墳	高取町	右片袖	竈・甑・鍋・甕	同 上
7	稲村山古墳	高取町	竪穴式	甑	『考古学雑誌』27-4 日本考古学会 1937
8	沼山古墳	桜井市	右片袖	竈・甑・釜・鍋	『沼山古墳・益田池堤』 榎原研 1985
9	桜井児童公園2号墳	桜井市	右片袖	甑・釵子	『奈良県史積名勝天然記念物調査抄報 11集』 奈良県教委 1959
10	珠城山1号墳	桜井市	右片袖	甑	『珠城山古墳』 奈良県教委 1956
11	浅古所在古墳	桜井市	—	竈	『奈良県古墳発掘集報Ⅱ』 榎考研 1978
12	植松東4号墳	桜井市	右片袖	竈	『桜井市内埋蔵文化財 1994年発掘調 査報告書1』 桜井市文化財協会 1995
13	忍海H-41号墳	御所市	右片袖	竈	『寺口忍海古墳群』 新庄町教委 1985
14	オイダ山古墳	御所市	—	竈・甑・甕	『大和志』4-8 1937
15	笛吹遊ヶ岡古墳	御所市	—	竈・甑・鍋他	『古墳発掘品調査報告』 帝室博 1937
16	勘定山古墳	五條市	横口式石槨	竈	『勘定山古墳』 榎考研 1981
17	石田1号墳	宇陀市	—	竈・甑他	『石田1号墳』 榛原町教委 1985

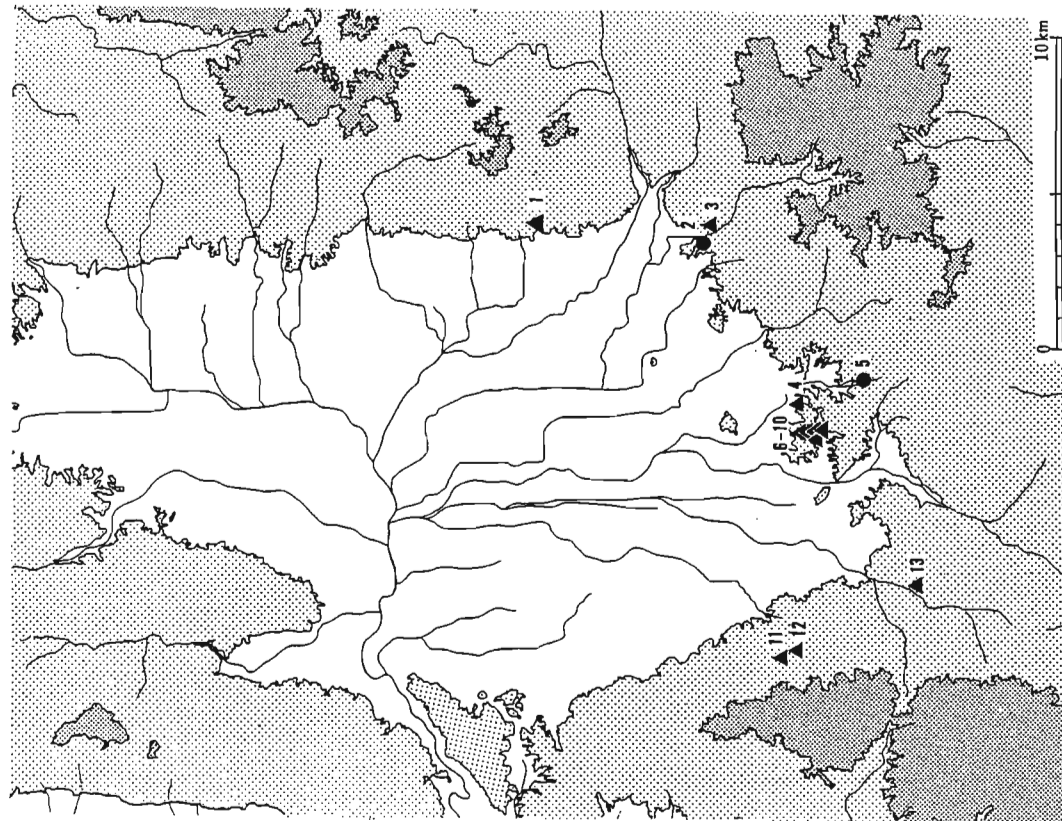
飛鳥周辺のミニチュア炊飯具出土主要遺跡(『上5号墳』 榎考研 2003 一部改変)



調査位置図



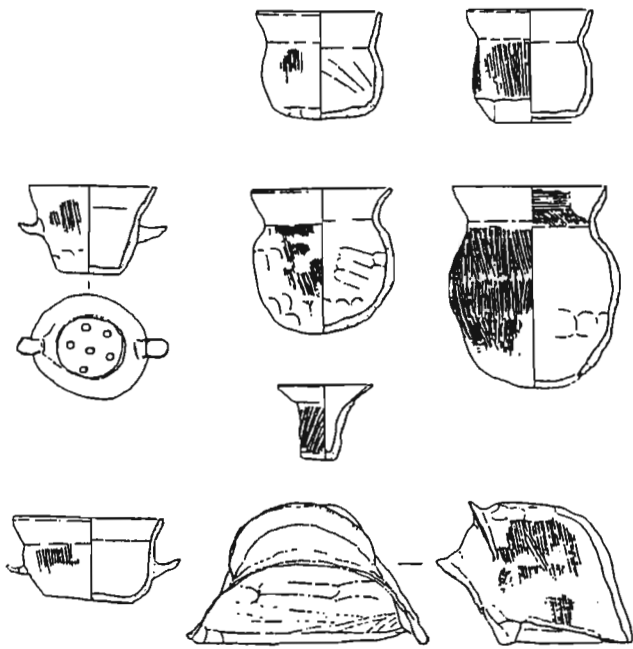
真弓遺跡群(Ⅲ区)遺構図



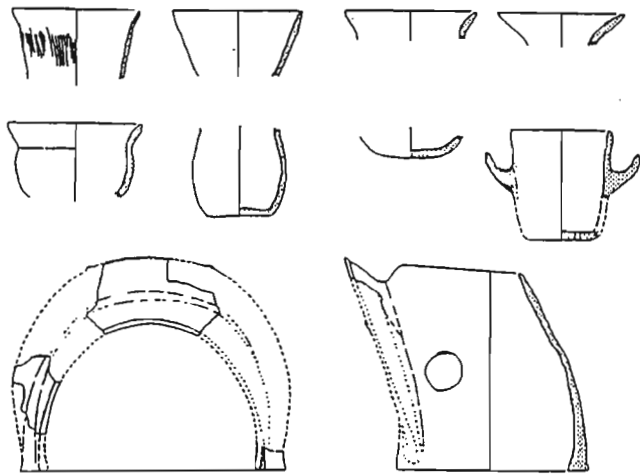
大和の小型炊飯具分布図（位置不明，枠外は除く。●5世紀 ▲6世紀）
 1 珠城山1号墳 2 桜井児童公園2号墳 3 浅古 4 沼山古墳 5 稲村山古墳
 6 ナンタニ6号墳 7 ナンタニ5号墳 8 ナンタニ2号墳 9 ナンタニ1号墳
 10 フキタ1号墳 11 寺口・忍海古墳群 12 笛吹遊ヶ岡古墳 13 オイダ山古墳
 (関川尚功「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第9 橿原研編 1985より転載)



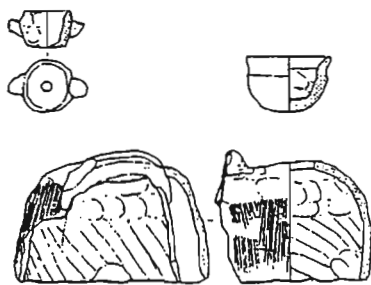
飛鳥地域の渡来系の古墳と朝鮮系土器出土地
 (●5世紀の古墳 ▲6世紀の古墳 ○朝鮮系土器出土地)
 1 新沢126号墳 2 沼山古墳 3 与楽鑑子塚古墳 4 乾城古墳
 5 フキタ2号墳 6 与楽古墳群ナンタニ支群 7 真弓鑑子塚古墳
 8 坂ノ山4号墳 9 稲村山古墳 10 南山4号墳



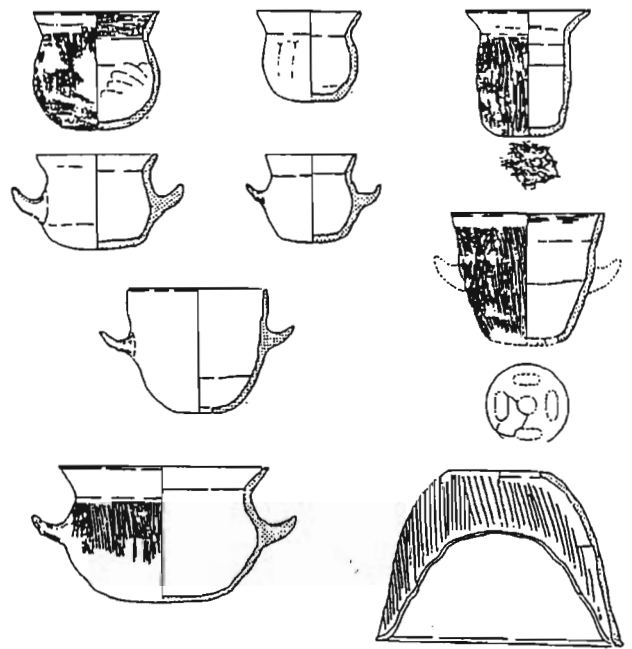
ナシタニ1号墳



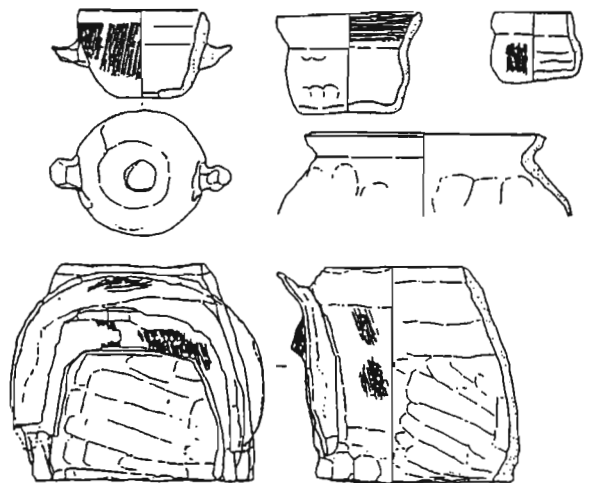
ナシタニ2号墳



ナシタニ5号墳

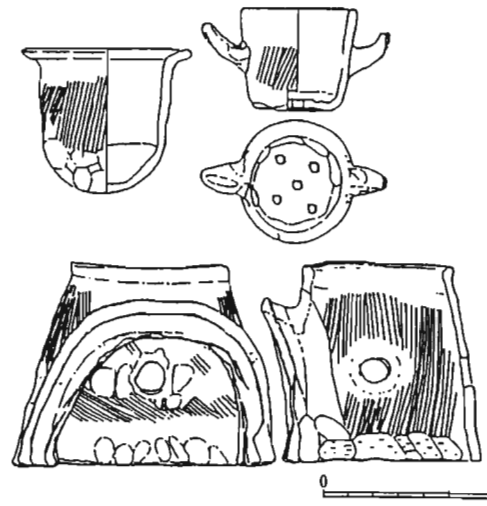
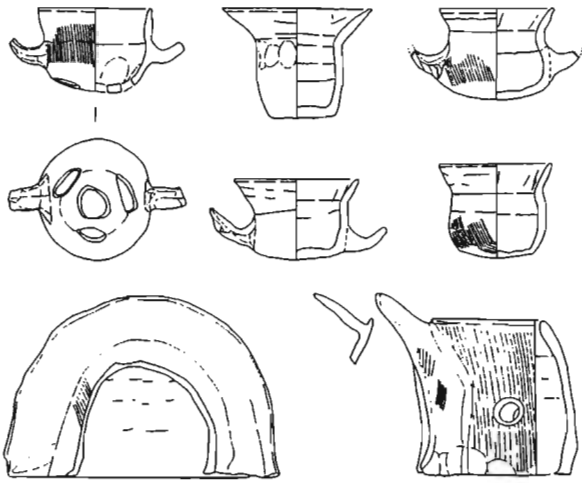


ナシタニ6号墳



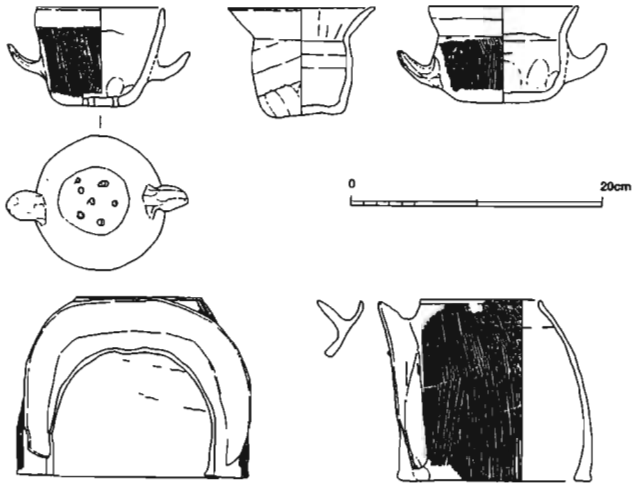
ヲギタ2号墳

ミニチュア炊飯具集成①

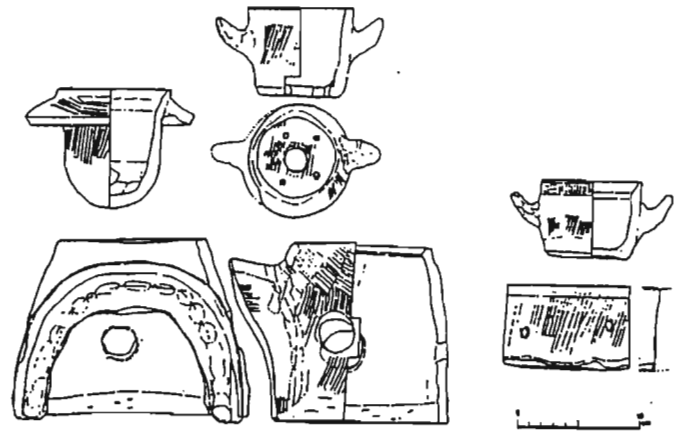


0 20cm

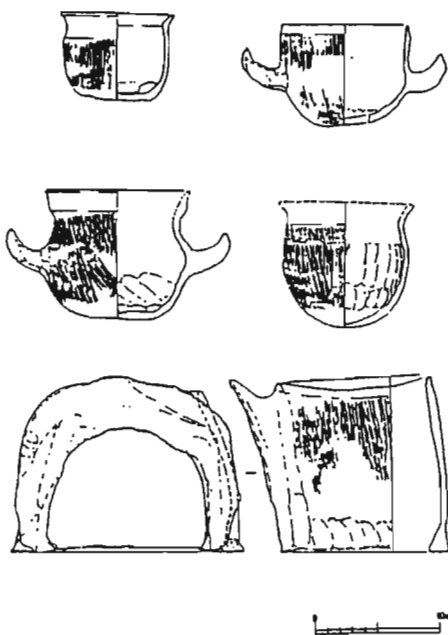
オイダ山古墳



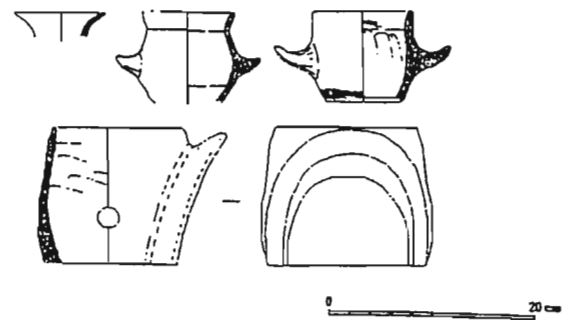
上5号墳



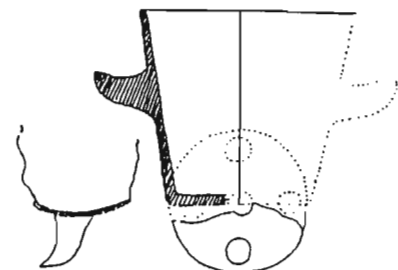
笛吹遊ヶ丘古墳



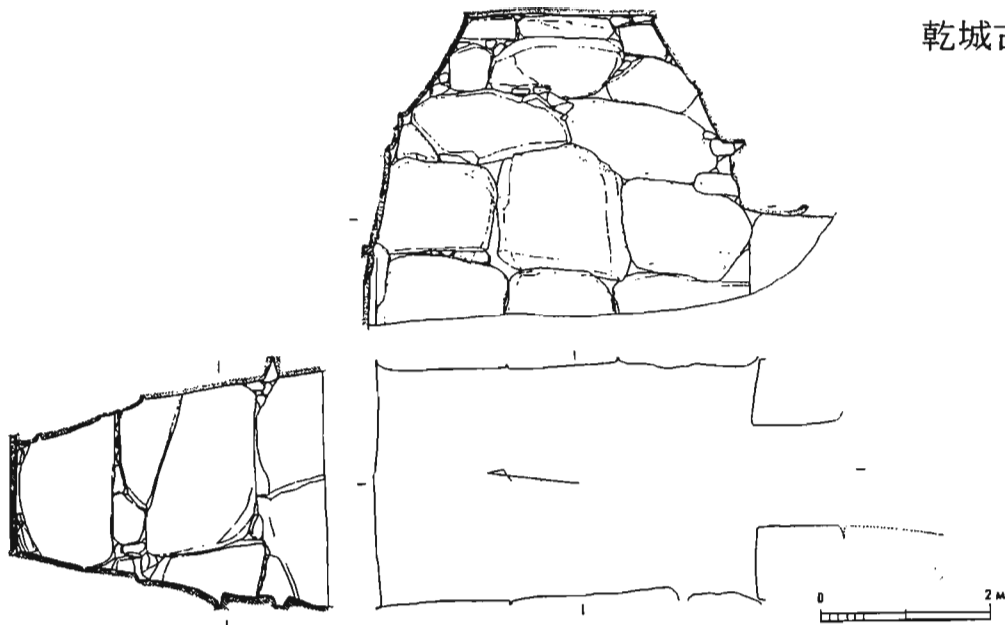
沼山古墳



勘定山古墳

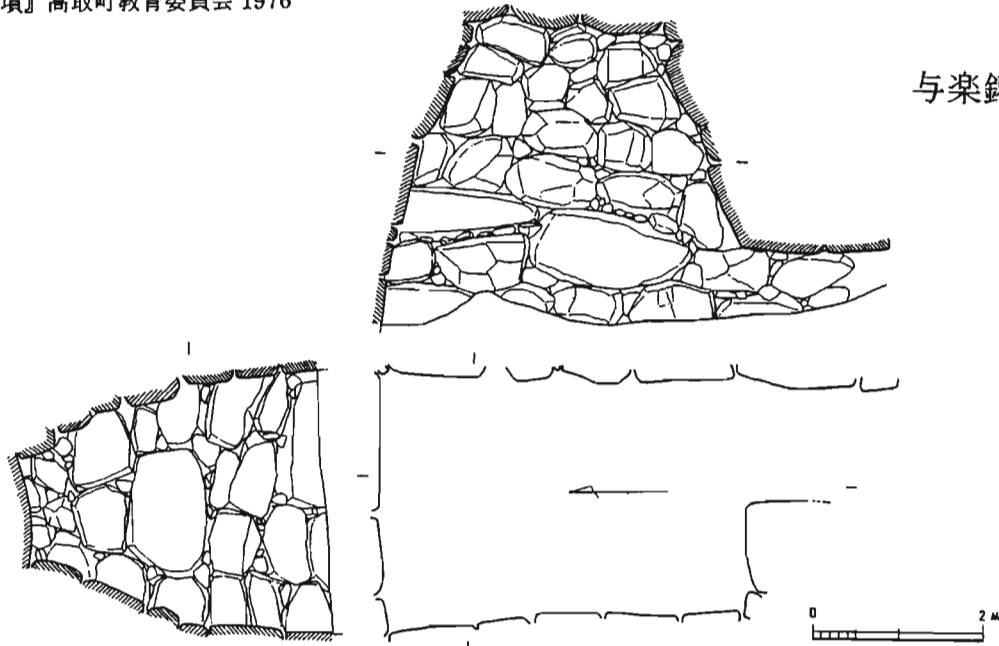


乾城古墳



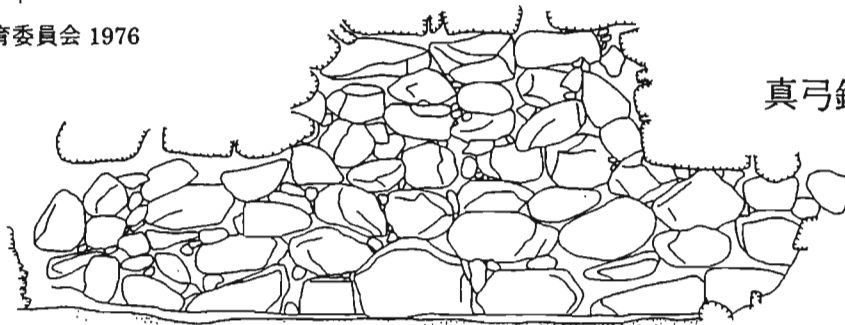
『高取町の古墳』高取町教育委員会 1976

与楽罐子塚古墳



『高取町の古墳』高取町教育委員会 1976

真弓罐子塚古墳



『明日香村史』明日香村史刊行会 1974

貝吹山南麓の穹窿式横穴式石室



講演

「最近の調査からみた飛鳥宮」

橿原考古学研究所 総括研究員

林部 均 氏

最近の調査からみた飛鳥宮

飛鳥京跡と律令国家の形成

奈良県立橿原考古学研究所

林部 均

I. はじめに

- ・飛鳥京跡（＝飛鳥宮）は奈良県高市郡明日香村岡に所在する宮殿遺跡である（図1・2）。
- ・1959年から発掘調査、3時期の宮殿遺構がほぼ同じ場所に重複して存在。
- ・下層からⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期。そして、Ⅲ期はさらにⅢ-A期・Ⅲ-B期に区分。
- ・出土した土器や木簡の年代、遺構の詳細な検討からⅠ期が舒明の飛鳥岡本宮（630～）、Ⅱ期が皇極の飛鳥板蓋宮（643～）、Ⅲ-A期が斉明・天智の後飛鳥岡本宮（656～）、Ⅲ-B期が天武・持統の飛鳥浄御原宮であることがほぼ確定（図3）。
- ・発掘調査でその形態が最も明らかとなっているⅢ期の遺構を取り上げて、発掘調査の成果を紹介するとともに、その歴史的な位置づけについて考える。

II. 飛鳥京跡の発掘調査

- ・飛鳥京跡のⅢ期は内郭とエビノコ郭と外郭とから構成。内郭だけの段階がⅢ-A期（後飛鳥岡本宮）、内郭をそのまま継承して、その東南にエビノコ郭を造営したのがⅢ-B期（飛鳥浄御原宮）（図5・6）。

内郭の構造

- ・内郭は南北約197m、東西152～158mの逆台形を呈し、周囲を屋根つきの掘立柱塀で囲む。
- ・内郭は南よりの掘立柱塀S A7904を境に北区画と南区画とに区分。北区画には人頭大の石が敷かれ、南区画にはパラスが敷き詰められる。内郭の中での性格の違いを反映。
- ・内郭の中核、主軸線上には南から南門S B8010、前殿S B7910、さらに、その北にはS B0301、S B0501が配置（図5・6）。
- ・南門S B8010は内郭全体の正門。
- ・前殿S B7910は内郭南区画の正殿であるとともに、内郭全体の正殿。
- ・S B0301・0501は、北区画のそれぞれの空間に配置された正殿。S B0301は北区画の南の正殿、S B0501は北区画の北の正殿。
- ・北区画の南の正殿S B0301は、東西に小殿S B0401・8542を配し、廊状建物でつなぎ一体として利用。同じく北区画の北の正殿S B0501も、西に小殿S B0502を配置し、廊状建物でつなぎ、南の正殿S B0301と同一構造・規模。
- ・内郭北区画、内郭のほぼ中央には、同一構造・規模をもった建物群が、南北に並んで配置（図5）。
- ・内郭南区画のS B7910の南や北区画のS B0301・0501の南には、それぞれ石敷の広場。「庭」と呼ばれた儀式をするための空間。なかでも、S B0501の南の「庭」が最も広い。建物の性格を考えていくうえで重要な手がかり。

エビノコ郭の構造

- ・エビノコ郭はⅢ-B期に新たに付加された区画。南北55.2m、東西92～94m。屋根つきの掘立柱塀が囲む。
- ・同じⅢ期の石組溝を埋めて造営。内郭よりは確実に新しい。廃絶は内郭と同じ藤原宮期。

・エビノコ郭は中央にS B7701（エビノコ大殿）を配置。飛鳥京跡の発掘調査で検出された最大の建物。エビノコ郭の正殿。

・エビノコ郭は南に門はなく、西に門が開く。エビノコ郭は空間としては西を向くが、正殿は南を向くという変則的な形態（図6）。

・『日本書紀』の天武紀には、飛鳥浄御原宮にかかわって「南門の庭」「西門の庭」という記事。内郭の正門である南門S B8010を「南門」、エビノコ郭の正門S B7402を「西門」に当ててよいならば、内郭の南、エビノコ郭の西の空間が、Ⅲ-B期、飛鳥浄御原宮の儀式空間。Ⅲ-B期は、Ⅲ-A期の内郭とその南にあった儀式空間をそのまま継承して、その東南にエビノコ郭をつくったため、このような変則的な形態となった。

建物の性格とⅢ-A期からⅢ-B期への変遷

・発掘調査で検出された大型建物は、どういった性格の建物か。

・飛鳥宮の場合、Ⅲ-A期とⅢ-B期とで、エビノコ郭の有無など、少なからず建物配置が変化。Ⅲ-A期とⅢ-B期とで、建物の性格などは厳密に区別して検討する必要がある。

・Ⅲ-A期（後飛鳥岡本宮）は内郭だけ。

・内郭の南区画は天皇が公的な儀式などをおこなう空間。前殿S B7910は公的な空間に配置された正殿。内郭全体の正殿。天皇（大王）は前殿S B7910に出御して公的な儀式をおこなう。

・北区画は天皇（大王）が日常生活をおこなう私的な空間。その中でも南の正殿S B0301は、なお公的な機能をもった空間に配置された正殿。北の正殿S B0501は、より私的な空間に配置された正殿。

・Ⅲ-B期になると、内郭はそのまま、エビノコ郭がつくられる。エビノコ郭の正殿S B7701は、公的な機能をもった正殿（大極殿）。

・エビノコ郭の造営により内郭の南区画のS B7910の公的な機能は、その正殿S B7701に移る。内郭全体が天皇の私的な空間、内裏へと変化。

Ⅲ. 飛鳥京跡と律令国家の形成

・最近の調査・研究の成果を受けて、どういったことが考えられるか。また、どういった課題が残されているか。

Ⅲ-A期からⅢ-B期へ

・飛鳥京跡のⅢ-A期が斉明・天智の後飛鳥岡本宮、Ⅲ-B期が天武・持統の飛鳥浄御原宮であることがほぼ確定。Ⅲ-A期は内郭だけの段階、Ⅲ-B期は内郭をそのまま継承、その東南にエビノコ郭を造営して、再整備をおこなった段階。

・Ⅲ-A期からⅢ-B期へと移行するにあたって、内郭は、なぜ、そのまま継承されたのか。天武の飛鳥浄御原宮は、なぜ内郭、すなわち後飛鳥岡本宮をそっくりそのまま継承したのか。

・天武の複雑な即位事情が絡む。天武はもともと、天智の後継者として皇位継承の有力な候補者。しかし、天智の晩年、天智からの皇位継承要請を断り、吉野に入り出家。天武の皇位継承権は消滅。天武は壬申の乱という大規模な軍事クーデターを起こし、武力で皇位を奪った。

・天武の王権は篡奪王権。天武には、軍事力という剥き出しの権力はあったが、皇位継承の正統性が乏しい。天武は自らの皇位継承を正統づける様々な装置をつくる。天孫降臨神話、天皇号、歴史書。

・天武は壬申の乱を革命と意識。中国の王朝交代を支える思想である天命思想が存在。

・しかし、天武は新たな王朝の創始者として、新たな宮の造営をおこなわない。天武5年（676）に新城の造営→中断。天武13年（684）、はじめて宮室の地（藤原宮）を決定→なぜか。

・一般的に言われているように天武が絶対的な権力をもっていたならば、新しい宮の造営などは、さほど困難なことではない。天武は、なぜか新しい宮の造営はしない。不思議としか言いようがない。

- ・母である斉明の後飛鳥岡本宮（内郭）を継承し、エビノコ郭だけを造営して飛鳥浄御原宮。
- ・天武の即位にかかわる複雑な経緯。天武の王権は篡奪王権。後飛鳥岡本宮そのまま継承し、斉明の後継者であることを目に見えるかたちで示し、自らの皇位継承を正統づけた。
- ・天武はⅢ-A期の内郭をそのまま継承、エビノコ郭だけを付加し、Ⅲ-B期、飛鳥浄御原宮とした。

大極殿の成立

- ・どうして、エビノコ郭だけを付加したのか（図5・6）。
- ・天武の複雑な即位事情や、皇位継承の正当性が絡む。
- ・エビノコ郭は飛鳥京跡の発掘調査では、最大規模の建物。エビノコ郭の正殿は平城宮などの建物配置の比較などから、『日本書紀』に記された「大極殿」。
- ・「大極殿」は中国の宮殿にある「太極殿」の思想を取り入れたもの。「太極」とは、中国の『易経』によると宇宙の根源（始原）を示す言葉。天の最高神（昊天上帝・天帝）の居所を示す。「太極殿」は、天帝の代行者として天下に臨む天子の居住地。天から命令を受けて天下を支配する場が「太極殿」。王権の正統性を象徴的にあらわす建物が「太極殿」。
- ・天武の王権は、武力で皇位を奪った篡奪王権。天武には皇位継承の正統性が欠如。
- ・皇位継承に正統性をもたせるため、自らも天皇として権威をもつため。天武は中国の「太極殿」の思想を導入、エビノコ郭正殿、大極殿を造営。
- ・天武の王権とは、どういったものであったのか。天武を過小に評価するつもりはないが、これまでの古代史では、天武をあまりにも過大に評価しすぎていないか。
- ・飛鳥宮の発掘調査の成果は、天武の実像を考える手がかりを遺構というかたちで示してくれる。

飛鳥京の形成

- ・飛鳥に最初の宮室を営んだのは舒明。飛鳥岡本宮。飛鳥京跡のⅠ期遺構。北で西に約20度振れる遺構群（図4・7）。大規模な地形改変はしていない。舒明は飛鳥岡本宮が火災焼失後、飛鳥を出て行き、再び戻ることはない。舒明は飛鳥を王権が支配拠点として意識的に整備しようとした形跡はない。
- ・飛鳥で最初に正方位の宮→飛鳥京跡のⅡ期遺構（図4・7）。皇極の飛鳥板蓋宮。地形条件を無視して、宮を正方位で造営→大規模な地形改変。飛鳥での宮都の形成史としては、この段階を積極的に評価すべき。皇極はその4年（645）乙巳の変の後、孝徳に譲位。宮は難波へと遷る。皇極が意図した飛鳥での支配拠点づくりは、再び、即位して斉明となるまで持ち越される。
- ・飛鳥に戻った斉明は、飛鳥を支配拠点として整備。『日本書紀』にも「時に興事を好む」。飛鳥京跡のⅢ-A期（図5）。酒船石遺跡、飛鳥京跡苑池遺構。「狂心の渠」と酷評される運河。石神遺跡の整備。水落遺跡（中大兄の漏剋）の整備。飛鳥は、王権の支配拠点として整備は格段に進み、「飛鳥宮」とも呼びうる特別な空間となる（図7）。
- ・天武の段階になると、支配拠点としての空間整備は、飛鳥の範囲を越えて、その周辺の飛鳥・藤原地域まで拡大（図7）。建物の造営方位を正方位に合わせた空間整備。北で西に約20度振れていた建物群も、この時期に正方位で建て直す。いっぽう、飛鳥・藤原地域のさらに周辺地域では、地形条件に制約され、建物の造営方位もバラバラ。建物の規模や密集度の点でも飛鳥・藤原地域に比べると、格段に劣る。この段階に至り、飛鳥・藤原地域は、視覚的に周辺地域とは異なった特別な空間へと飛躍→「飛鳥京」の形成。
- ・天武の頃から「京」「京師」という用語が『日本書紀』に頻繁に出てくると見事に対応。天武14年3月には「京職大夫直大参許勢朝臣辛檀努卒りぬ」という記事。「京」を所管する役人。行政区画・領域としての「京」がすでに存在。この「京」こそが、飛鳥・藤原地域に出現した周辺地域とは異なる特別な空間に対応→「飛鳥宮」にともなう「飛鳥京」の形成。

古代宮都変遷と飛鳥宮・飛鳥京

- ・「飛鳥宮」、「飛鳥京」は古代宮都変遷の中でどのように位置づけられるのか。
- ・Ⅰ期が舒明の飛鳥岡本宮、Ⅱ期が皇極の飛鳥板蓋宮、Ⅲ期が斉明・天智の後飛鳥岡本宮、天武・持統の飛鳥浄御原宮。Ⅰ期の飛鳥岡本宮をのぞくと、基本的に宮は、難波遷都と近江遷都の一時をのぞいて、ほぼ同じ場所に継続してつくられる。
- ・「飛鳥宮」以前の宮が歴代遷宮と称して、大王一代ごとに、その宮の位置を遷していたこととは明らかに異なる。
- ・Ⅱ期の飛鳥板蓋宮の段階には、時間的な関係もあり、それほど宮の整備は進まなかったが、Ⅲ期の後飛鳥岡本宮の段階になると宮中枢だけではなく、周辺の様々な施設も整備、宮はより立派で荘厳なものへと発展、飛鳥の盆地そのものが、「飛鳥宮」とも呼びうる空間へと発展。
- ・Ⅲ-B期の飛鳥浄御原宮の段階となると、王権による支配拠点の整備は、周辺の飛鳥・藤原地域まで拡大、周辺地域とは視覚的に区別しうる「京」とも呼びうる特別な空間が出現→「飛鳥京」。
- ・「飛鳥京」には条坊制はいまだ導入されていない。正方位を指向した都市計画のようなものがあるだけ。しかし、このような周辺地域とは視覚的に区別される「京」が成立する段階を、藤原京における条坊制の導入の歴史的な前提として評価する必要がある。
- ・条坊制をもたない「京」の成立が前提となって、はじめて藤原京で条坊制を導入。
- ・飛鳥宮は、大王一代ごとで宮を変えた歴代遷宮の段階をすでに脱し、条坊制こそ導入されていないが、すでに、その周辺に「京」が形成されつつある、条坊制都城が成立する直前の段階の古代宮都。

IV. これからの飛鳥京跡の発掘調査

- ・飛鳥京跡のⅢ期の宮中枢の構造やその変遷は、ほぼ明らかになった。その歴史的な位置づけも、どういった段階の宮都であるのか、そして、条坊制都城にいかに関係して展開していくのかも、見通しがたった。
- ・飛鳥時代中ごろから後半にかけての宮都の実態はおおむね明らかにできた。
- ・それ以前の宮都はどういったものであったのか。
- ・飛鳥時代中ごろ以前の宮都としては、『日本書紀』からその構造が復元できる推古の小墾田宮（603～）があるだけ。しかも、発掘調査でわかっているのではない。
- ・飛鳥時代中ごろ以前の宮の発掘調査が必要。飛鳥京跡では、Ⅰ期、Ⅱ期の構造解明が今後の課題。
- ・飛鳥京跡には、舒明・皇極・斉明・天智・天武・持統の宮が所在。飛鳥宮の発掘調査で検出される遺構には、まさに律令国家の形成過程が具体的に反映されているといっても過言ではない。

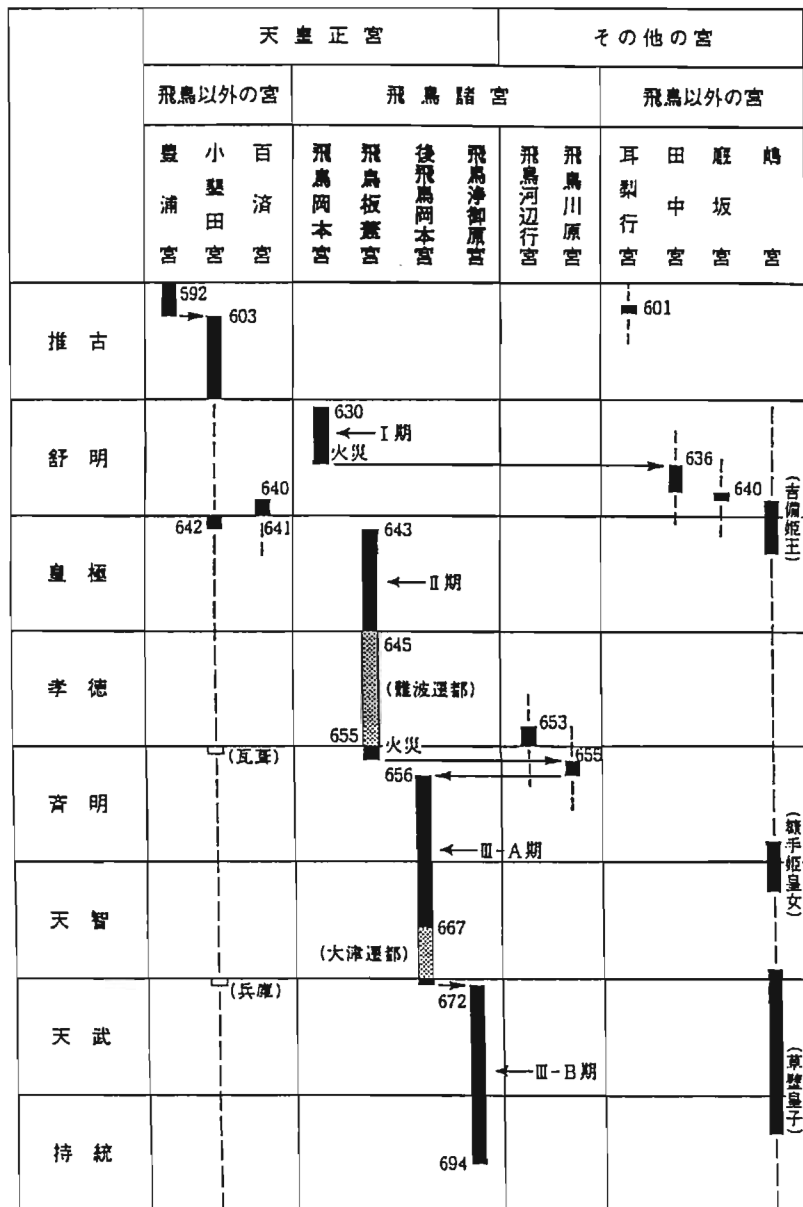
[引用・参考文献]

- 小澤毅 2004 『日本古代宮都構造の研究』 青木書店。
- 林部均 2001 『古代宮都形成過程の研究』 青木書店。
- 林部均 2003 「飛鳥の諸宮と藤原京の成立」『古代王権の空間支配』 青木書店
- 林部均 2004 「古代宮都と国家形成」『歴史評論』655 校倉書房
- 林部均 2005 「古代宮都と天命思想—飛鳥浄御原宮における大極殿の成立をめぐる—」『律令制国家と古代社会』 塙書房
- 林部均 2005 「伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期遺構の構造と変遷—後飛鳥岡本宮から飛鳥浄御原宮へ—」『飛鳥文化財論攷』（納谷守幸氏追悼論文集）
- 林部均 2006 「難波宮から飛鳥宮へ」『難波宮と飛鳥宮—新たな歴史像を語る—』 大阪市文化財協会
- 林部均 2006 「飛鳥の諸宮と藤原京—都城の成立—」『古代都城のシンボリズム』 青木書店（印刷中）
- 林部均 2006 「飛鳥京跡の発掘調査と古代宮都研究」『続明日香村史』 考古篇
- 林部均 2007 「飛鳥の諸宮」『大和の都城・寺院・苑池』（新近畿日本叢書「大和の考古学」5）印刷中



图1 飛鳥京跡(飛鳥宮)位置図





聖徳太子

大化改新

壬申の乱

藤原宮

大宝律令

図1 飛鳥の諸宮の移り変わり(小沢2003に加筆。表中のI期などの表記は伝承飛鳥板蓋宮跡での遷都変遷に対応)

図3 飛鳥の諸宮の移り変わり(小澤2003に加筆)

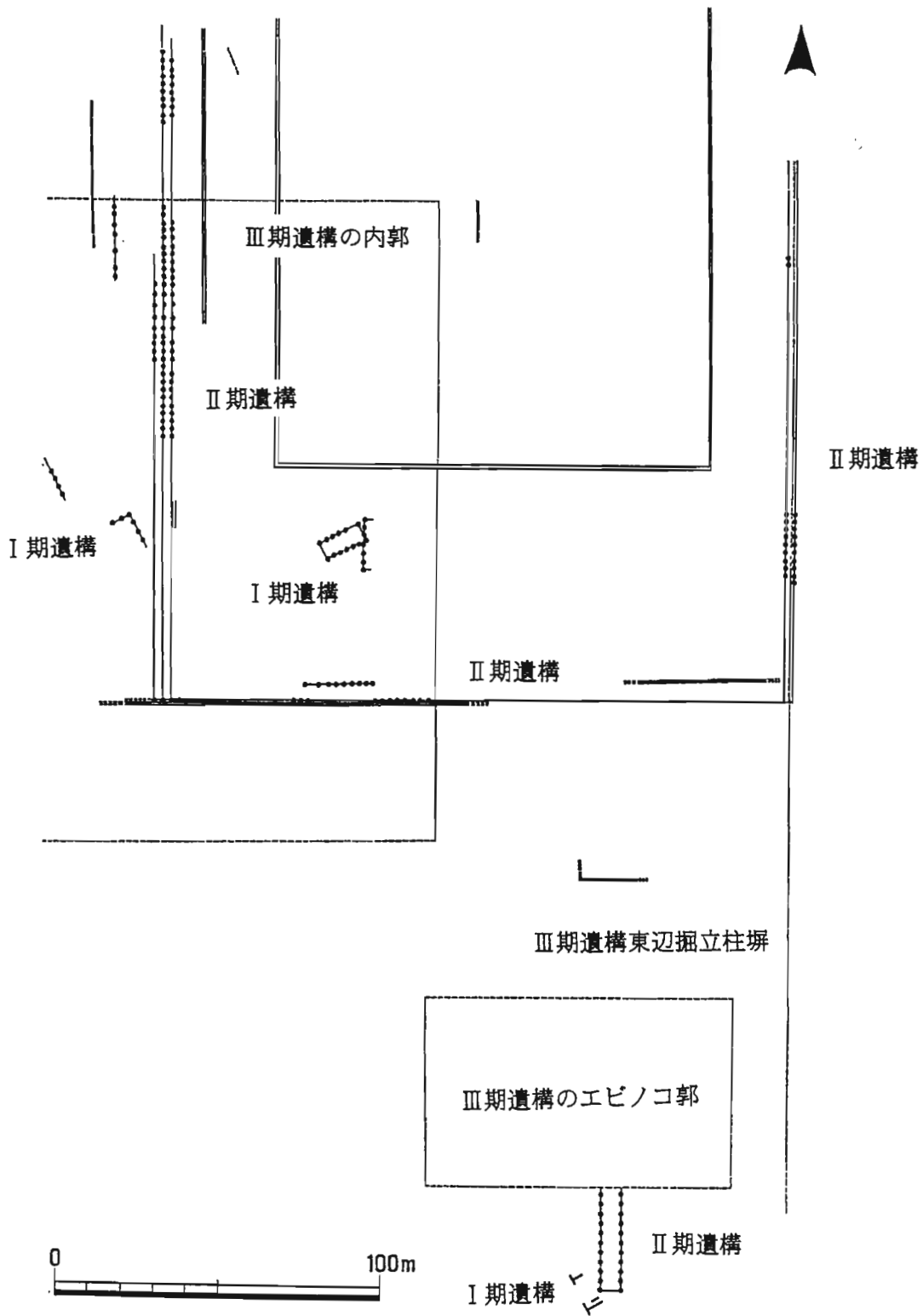


図4 飛鳥京跡(飛鳥宮) I 期遺構・II 期遺構(林部 2006)

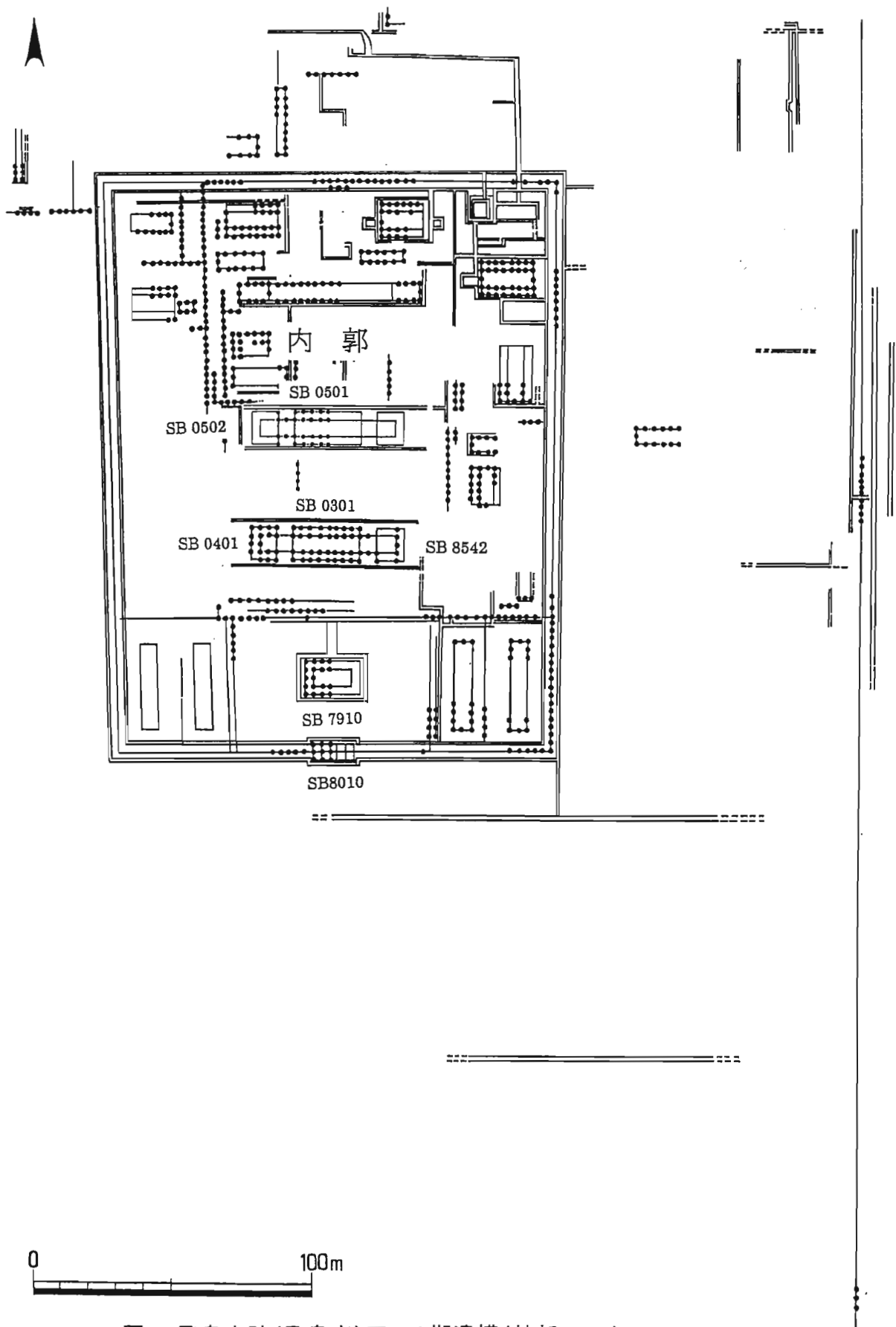


図5 飛鳥京跡(飛鳥宮)Ⅲ-A期遺構(林部 2006)

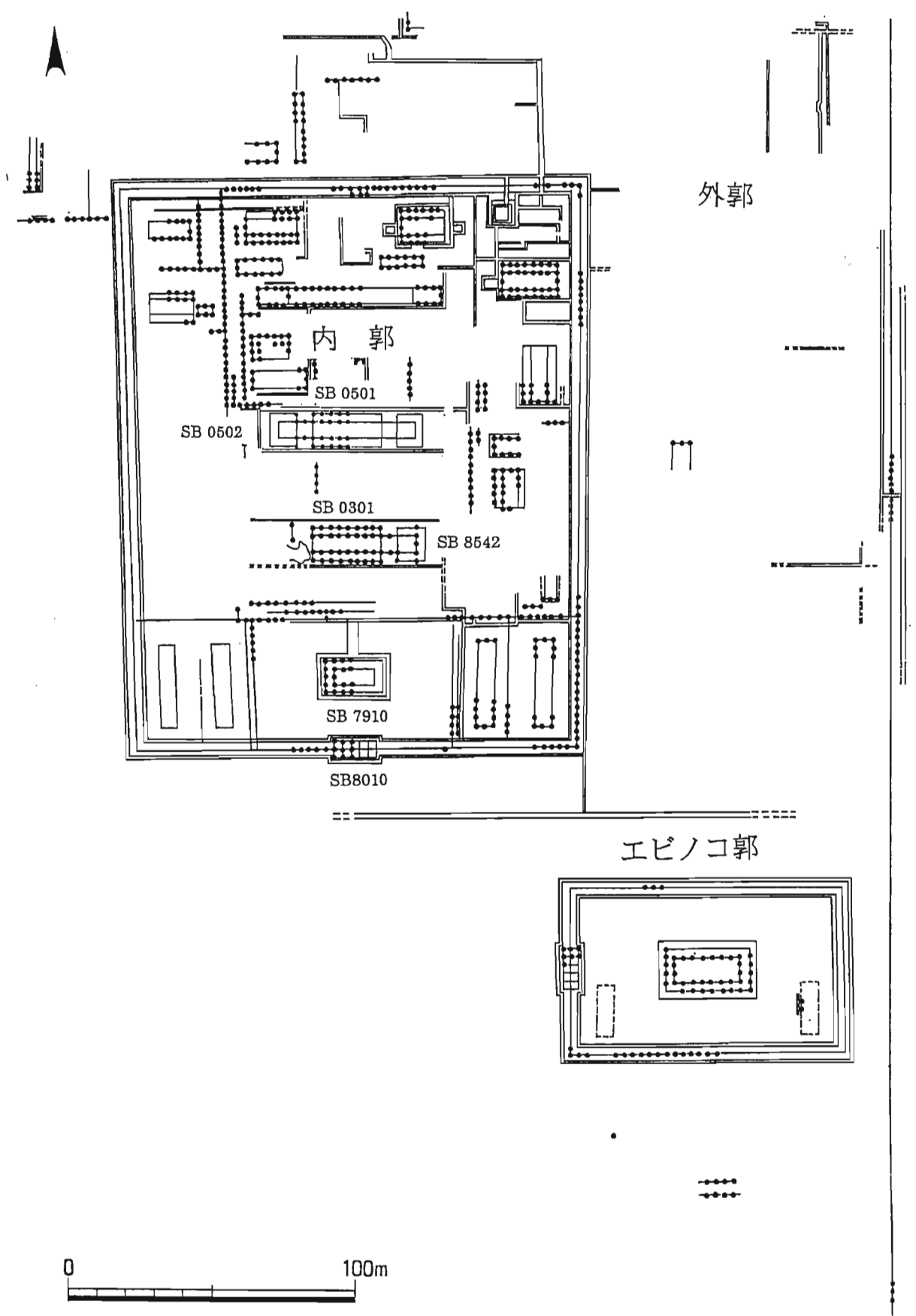
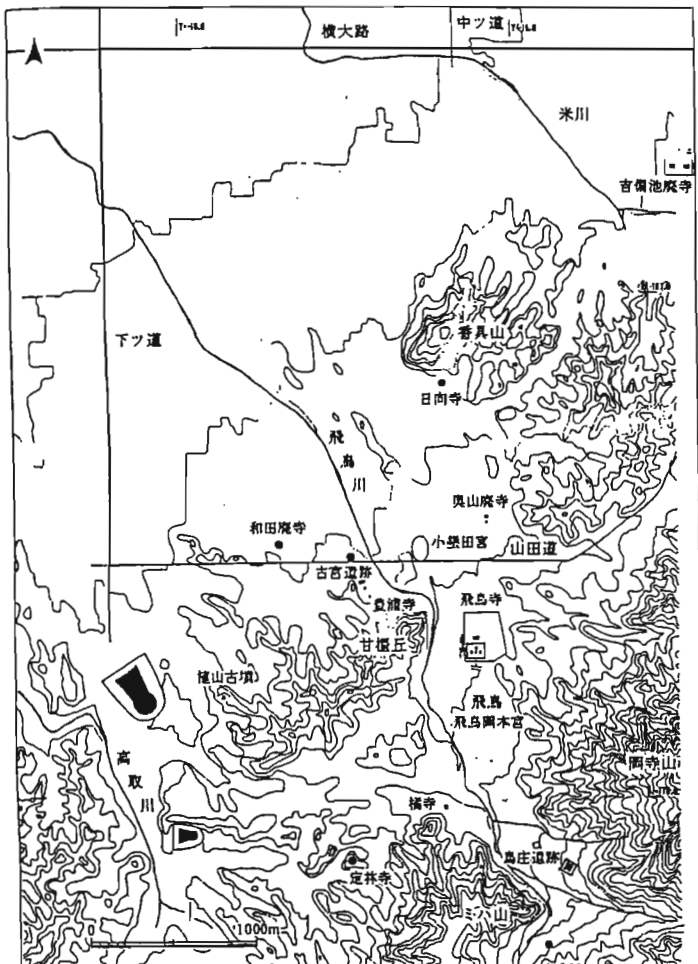
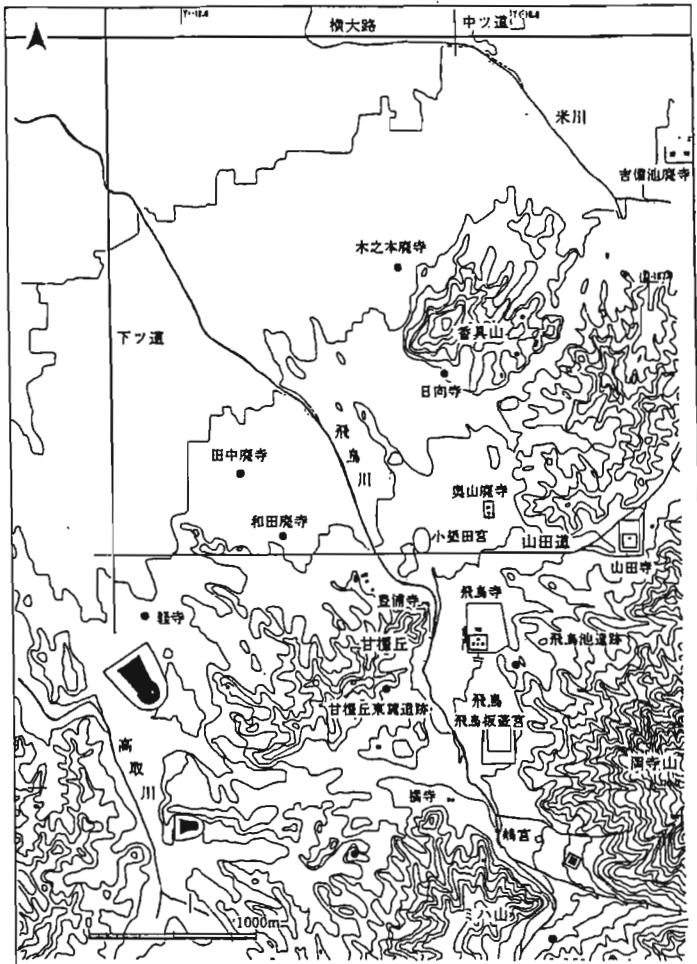


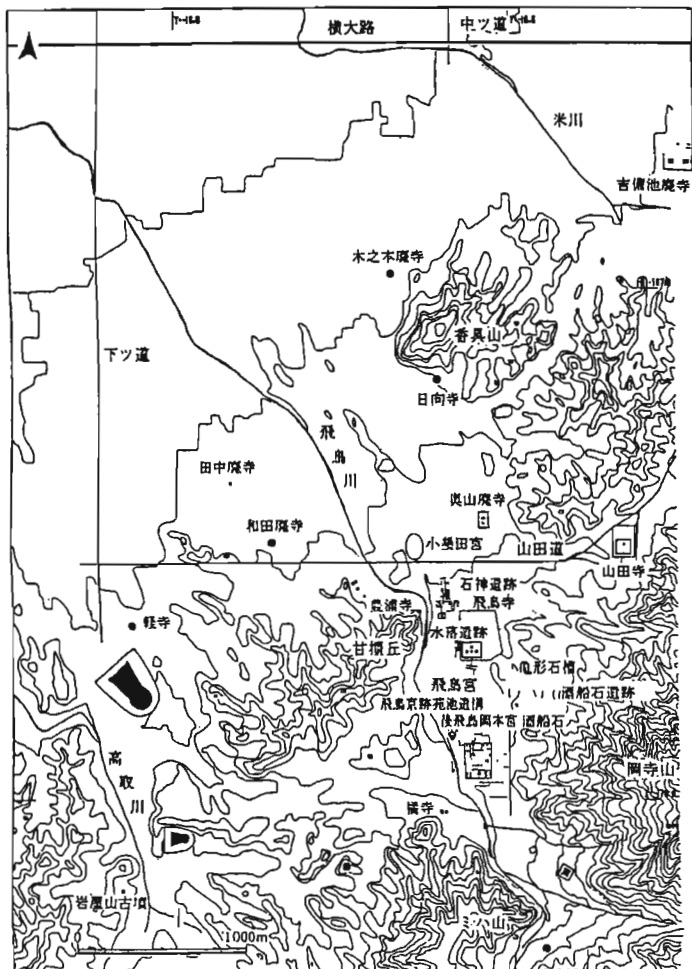
図6 飛鳥京跡(飛鳥宮)Ⅲ-B期遺構(林部 2006)



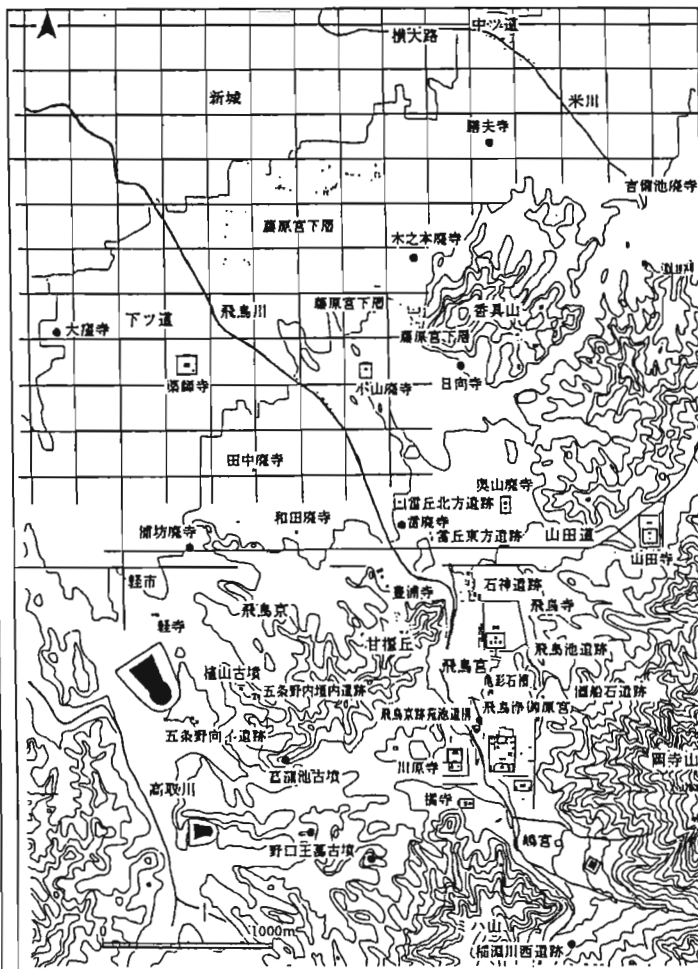
舒明朝の飛鳥・藤原地域



皇極朝の飛鳥・藤原地域



斉明朝の飛鳥・藤原地域



天武朝の飛鳥・藤原地域

図7 飛鳥・藤原地域の移り変わり(林部 2005)